
愛する人を亡くされた方へ

「死」は、誰もが必ず経験することでありながら
向き合うことが非常に難しい経験のひとつです。

自分のことについても、他者のことについても
愛する人のことについては、ことさら。

今回ここに書き記す内容は、「神との対話」そして「神へ帰る」の著者である
ニール・ドナルド・ウォルシュ氏と私たち (nana&Joe) が、今回の大きな出来事に際し、
今、悼み、哀しみにくれている方々の心に、たとえ小さくとも灯りがともることを願いながら
プライベートにやり取りされた内容です。

ここで語られていることは、科学的に証明されているものではありません。
しかしながら、ウォルシュ氏が長年真摯に答えを求め
今も神との対話を続ける中からもたらされた、**ひとつの「真実」**です。

そして私は、心理臨床家として、御家族やパートナー、親しい友人を
病気や事故、または自殺によって亡くされた多くの方々と向き合う中で
これらのことが、「真実」であることを、実際の経験を通し、幾度となく確認しています。

死は、私たちがこれまでの文化の中で聞かされてきたような
ただ怖れ、悲しむべき出来事ではなく

永遠に生き続ける魂の旅路に存在する、ひとつの輝かしい通過点 なのだと知ることは、
まだしばらくのあいだ、この世界で生きていく私たちに、きっと安らぎをもたらしてくれるでしょう。

だからといって、「悲しんではいけない」と言っているのではありません。

今は、もう二度と笑える日など来ない、と思うかもしれませんが
あるいは、今生きている周囲の人々のために悲しむ姿を見せず
気丈に振舞っている方もいらっしゃるかも知れません。
なぜ私ではなく、あの人が逝ってしまったのかと
御自分を責めている方もいらっしゃるでしょう。

あなたの、そのとめどもない悲しみや悼み、やり場のない憤りは、
故人をそれだけ深く愛していた証拠です。

声を出して、泣いてもいいのです。
あなたと同じように悲しんでいる人々と想いを分かち合ってください。

愛する人を失った痛みが癒されるには、時間が必要です。

この世界の時間という幻想は、やさしく、少しずつ
でも確実に私たちを癒してくれるものです。

いつまでも、同じ苦しみが続くことは、決してありません。

「ああ、これでよかったのだ」「みんな、大丈夫だったんだな」と
安心できる日がきっと来ます。

暗闇の中に、一日もはやく、小さくとも、あたたかな光が灯ることを、
あなたと、あなたを愛する人々が「ひとつ」となって
笑い合える日が来ることを、祈っています。

今は霊的な存在となった、あなたの愛する人も
ただ、それだけを望んでいるのですから。

あなたが、あなたの中にある「真実」を見つけるために
ここに記すことが、少しでも役に立つことができるならば、幸いです。

魂の望みに反する「死」は、ひとつも無い

私たちが「死」と呼ぶ経験の、ある段階で、魂は、最も重要な質問をされる。

その質問とは、
「あなたは、とどまりたいか？」だ。

それは想像し得る限り、最も重要な「自由な選択」の瞬間だ。
その時どの魂も、**どのように、どこで、生き続けるか** を、自分で選ぶことができる。

たった今、後ろに残してきた人生に戻って、生きるという経験を選ぶか
それとも前進して、スピリチュアルな領域に生きる経験を選ぶか。

それは、物質的な世界で身体を持って生きるか
霊的な世界で純粋なエネルギーとして永遠の今を生きるか、ということだ。

物質的な世界の人生に戻るための条件や資格は、一切無い。
ただ「今は、まだ死にたくない。さっきまでの人生に戻りたい」と言えば、(感じれば、思えば)
すぐに物質的な世界、死ぬ寸前の瞬間に送り返される。

物質的な世界でつかう「身体」という道具を手放し、次へ進む選択もある。
魂が身体を離れるのは、この特別なひとつの人生における旅路、課題を終えた時だ。

どの場合でも、**誰ひとり、自らの魂の望みに反して死ぬことは、決してない。**

そしてこの二つの領域、物質的な世界と霊的な世界は、
同時に重なり合って存在しているのだ。

身体を手放しても、**愛する人々は、今ここに、あなたと共に、生きている。**

問い:ではなぜ、本当に愛し合い、一緒にいることが幸せだった人が、愛する人を置いて、逝ってしまうのでしょうか？

本当のことを言うと、彼らは、愛する者をおいて、逝ってしまったのではなく、より大きく深い愛を示すことのできる新しい形態(カタチ)物質的な身体にある時には表現不可能だった、より大きな真実の愛を表現することのできる存在として**愛する者と共にあることを選んだ**のだ。

魂が身体を離れるのは、この特別なひとつの人生における旅路、課題を終えた時だ。

この人生で経験するはずだったことを経験し、究極的な報いとして至福の経験を得る。文字通り、完全に、愛する人と永遠に結ばれ、**本質的な生命エネルギーが一体化する経験**これは、他でもなく、「ひとつ」になる経験だ。

この世の身体から去っても、愛する人の魂は、私たちと共に在る。

愛する人の身体に、原子レベルで浸透していく喜びを想像してごらん。これは至福の体験であり、これ以上の幸せはない。

霊的な領域(天国)では、お互いの魂が自由にそうすることができる。愛する人たちが、物質的な領域(この世)を離れる時にも、同じようにできるのだよ。

(愛する人が旅立つ時、御国(神の国、天国)が、地上にありますように。アーメン)

問い:人は死ぬとき、ひとつ(神、ソース)へ帰り 融合するか 愛する人のもとに残ることのどちらかを選ばなければならないのでしょうか？

それは、どちらかひとつの選択ではないのだよ。こちらをとれば、あちらはあきらめるしかないと言うのではない。バニラアイスかチョコアイスかどちらか一方を選ぶと言うようなことではなくて、**ただ「起こる」**のだ。

愛する者とすべての感覚をもって『ひとつ』になりたい、という衝動は、すべての存在に組み込まれている。

それが、私たちが神(神性)と再結合することを希求する原動力だ。私たちが「死」と呼んでいる出来事が起こるとき、この望みは完璧に満たされる。魂が物質的な身体を離れるときに、自然に、必然的にそうなる、といってもいい。

すべての魂は、新しいカタチで愛する者と共にいることを選び
また同時に次の経験へと進んで行く。

魂は、一度に色々なことができるのだ。
(霊的な領域では、時間も場所も存在しないのだから)

愛する人の存在を「呼ぶ」と言うのは、
離れたところにいる魂を呼んで、来てもらっているのではない。

愛する者の魂は、常に、あなたの傍に、あなたの中に居るのだから、
あなたが彼らを「呼ぶ」とき、あなたがいつもそこに在る存在に注意を向け、**認識する**ということなのだ。

ときどき「亡くなった、愛する人を自分のもとに呼ぶと、魂の進化が妨げられる」などと言う人がいるが
そんなことはないのだから、安心していいのだよ。

それどころか、**愛する人々と「ひとつ」になることは、死後の課題の重要な一部**なのだ。

愛する人たちは死んでなどいない、生きている。
生きて、愛する者の胸の中に存在しているのだ。

問い: 愛する者の魂の存在を、どうしたら感じられますか？

その方法の一つは、鏡で自分の目を見つめることだ。
驚くほど簡単だが、とても強力な方法だよ。

コツは、落ち着かない気分になっても、さらに見つめ続けること。
自分の目を深く、深く見つめ続ける。
できるだけ長く見つめたあと、そっと目を閉じて、じっと内側の感覚を味わってみる。
その時「エッセンスとの融合」を感じられることがよくある。

人生のパートナーや家族、親しい友人がいるなら、その人たちと目を見つめ合ってごらん。
同じことが起こるだろう。目は、魂の窓なのだ。深く、深く見つめれば、きっと魂に出会える。

そのとき、そっと、そっと、心で話しかけてごらん。
あなたのマインドでは理解できなかったことの答えが返ってくるだろう。

「無益な死」というものは、ひとつもない

無駄な「死」は無いし、無駄な「生」も、決してない

すべての人の死は、いつでも、その死に関わるすべての人々の人生での課題(目的)に役立つ。

あなたが、その死を知ったのならば、
それはあなたの人生の課題に関係しているということだ。

すべての死は、それに関わるそれぞれの魂を、
その真実に、生命の真実に、神の真実へと戻す。

そこに触れた人はすべて、この真実に向かって開かれ、それを経験する。

問い： 幼くして亡くなった子どもたちの課題について、もう少し聞かせてください。

この世界に来てから、ごく短期間のうちに身体を離れた魂
—— 生まれる前や幼いころ、また、若くして死んだ人たちの魂は、
常にとても高いレベルで、周囲の人たちの課題に奉仕し、進化を助けるために
物質の身体を持つことを選んでいる。

神の化身や天使と呼ばれる魂たちは、自らをそのようなものとして経験するためには
もっぱら他者のために仕えることが最高の道だと知っている。

彼らが助ける課題とは、つねに **あなたが「本当の自分」を思い出し、それを経験することだ。**

彼らにとって物質世界を早々に立ち去ることには、なんのためらいも、苦しみもない。
他者の課題を助けることが、**最高の喜び** なのだ。

あなたが「本当の自分」に戻り、微笑むこと。
それこそが、愛する人たちの望みなのです。

2011年3月 ニールドナルドウォルシュ氏との対話 訳・文責:nana&Joe